

18世紀フランスにおける種痘論争の隆盛

——1754–63年の展開を中心に——

長谷部 圭 人

0. はじめに

ラ・コストが国内初の種痘専門書『天然痘の種痘に関する手紙』を上梓した1723年から、ラ・コンダミーヌがフランス王立科学アカデミーで演説『天然痘の種痘に関する覚書』を行った1754年までを扱った前作に続き、本論攷では、フランス王国における種痘（人痘）導入をめぐる18世紀最大の医学論争であった種痘論争が最盛期を迎えた1754年から、パリ高等法院が種痘禁止の裁決を公布した1763年までの時期に焦点を当てる⁽¹⁾。当該期における哲学者^{フィロゾフ}⁽²⁾による種痘知識の普及活動については、既に複数の研究が論じている⁽³⁾。しかし、彼らの言説が医学界を含めた全体の議論の時系列にどう位置づけられるかは、依然として解明されていない。また、パリ大学医学部の内科医に関しては彼らと敵対し、種痘反対論を唱道する一枚岩の団体として図式的に描かれる傾向がこれまでの研究に強く、容認派と反対派が対立し、前者が投票で勝利した1763年以降の学内の動向との連続性も解明されていない。

そこで本稿は二つの目標を設定する。一つは1754年から1763年までの著作・パンフレットを主要史料に設定し、当該期の種痘論争の歴史的展開を解明することである。初期の種痘論争と当時の様々な社会的・政治的要因の連関に注目した前作と同様、本論攷も合理的な医学論争の範疇から逸脱する種痘論争の社会的・政治的性格に注目する。もう一つは、当該期の種痘論争で重要な役割を担った科学アカデミー、彼らと協力関係にあったトロンシャンなどの国外の内科医、そし

(1) 本研究全体の先行研究や問題意識については、長谷部圭人「18世紀フランスにおける種痘論争の始動——1723–1754年の展開を中心に」『総合人文科学研究センター研究誌/WASEDA RILAS JOURNAL』、第10号、2022年、135–137頁を参照されたい。

(2) 教養人^{オットム}に代わり18世紀に擡頭した、社交性と知性を兼ね備えた人物類型。森原隆「フランス啓蒙時代のフィロゾフ像」『史林』第65巻第1号、1982年、41–74頁にも詳しい。

(3) 前掲長谷部論文（2022年）の先行研究に加え、ラ・コンダミーヌの活動に注目したマルシルの研究（Yasmin Marcil, « Les périodiques littéraires et la campagne de La Condamine en faveur de l'inoculation contre la petite vérole », *Le Temps des médias*, n° 23, 2014, pp. 66-77）を挙げたい。また国内の科学思想史研究も、隠岐さや香「数学と社会改革のユートピア——ビュフォンの道德算術からコンドルセの社会数学まで」、金森修編著『科学思想史』勁草書房、2010年、127–186頁や井田尚「啓蒙と迷妄——『百科全書』の科学項目に見る〈誤謬理論〉の歴史」、前掲書187–253頁など、哲学者^{フィロゾフ}の視点から当該期の種痘論争を分析してきた。

て、パリ大学医学部の内科医という各アクターの動向に焦点を当てることである。これは当該期の議論を同時代の視点から巨視的に捉え、^{フィロゾーフ}哲学者中心の種痘論争観を再検討する試みとして位置づけられよう。まずは種痘論争が新たな局面を迎える1754年の動向から見ていきたい。

1. 1754年の「変革」——種痘論争の学際化と国際化

1750年代当時、議論再開の火付け役となったラ・コンダミーヌは科学アカデミー主導の測地遠征隊に参加し、アマゾン川流域の調査を行った探検家として知られていた。調査結果を纏めた『南アメリカ旅行記概略』（1745）と『エクアドル旅行記』（1751）が好評を博し、彼自身は、その精力的な学術活動と社交的性格から模範的な哲学者として讃えられた⁽⁴⁾。彼の種痘に関する最初の言及は、帰国後に著した『エクアドル旅行記』1743年12月付の「天然痘は当時、パラ―〔ブラジル北部の地方〕のインディオにも甚大な被害を与えており、彼らが自然に罹る時、殆ど常に死に至るものであったが、挿入 insertion によって罹る時はそうならない」⁽⁵⁾という記述である。執筆当初、用語を知らなかった彼は挿入と表現したが、1751年の出版時には既に、種痘 inoculation の語彙を索引に追加し、この医学技術に関心を寄せていたと確認できる。そして彼の研究成果は、1754年4月24日に発表された科学アカデミー初の種痘に関する演説と、同年に上梓された著作『天然痘の種痘に関する覚書』（以下、『覚書』）として結実する。医学教育を受けていない著者の種痘論としてはヴォルテール『哲学書簡』が先行するが、『覚書』は国境を股にかけて種痘関連の医学書を渉猟した点で一線を画す。

同書は部外者を排除してきた国内の内科医の医学議論に参入するため、1754年までの論争の歴史を詳細に捉えることから始まる。三部構成からなる本書の第一部「種痘史」は、国内外における種痘技術の発展史に加え、反対論を含めた論争史にも目を配った。そして、ラ・コストの著書を皮切りに種痘擁護論が次々に出版され、オルレアン公が病院での種痘実験を奨励したが、結局、彼の死で導入計画が頓挫してしまったと、一連の経緯を振り返っている⁽⁶⁾。また当時の反対論としては、エッケ『天然痘の種痘に対する疑念の諸理由』（1724）とデュヴラックのラテン語論文『天然痘ノ種痘ハ有害カ？』（1723）を取り上げ、前者を偏見に満ち、読むに堪えない文章とこき下ろす反面、種痘導入の見送りを事実上決定づけた後者には、第二部「反論に対する返答」で約30年越しの反論を展開していくことになる。彼はそこで、デュヴラック論文に何故長らく反論が出なかったのかを次のように考察している。

(4) ラ・コンダミーヌの経歴については以下の文献にも詳しい。Yasmin Marcil, « Entre voyage savant et campagne médicale : le séjour en Italie de La Condamine (1755-1756) », dans *Diciottesimo Secolo*, anno III, 2018, pp. 23-46.

(5) La Condamine, *Journal du voyage fait par ordre du roi, à l'Équateur, servant d'introduction historique à la mesure des trois premiers degrés du Méridien*, Paris, l'imprimerie royale, 1751, p. 199.

(6) La Condamine, *op.cit.*, 1754, pp. 11-14. 前掲長谷部論文、2022年も参照されたい。

いかなるパリ大学の医師もこの新たな方法〔種痘〕を活用することについて、率直に宣言したり、個人的に興味を持ったりしてこなかった。そのうえ、(デュヴラックの) 新たな反論に應えるために適した事実や情報もなかった。ジュリンの著書はまだ知られていなかった。おそらく我々の最も偉大な医師たちは、何らかの厄介事の責任を取らされることへの恐怖から流れに逆らうことを諦めたのであった⁽⁷⁾。

かくして彼は医師の立場を尊重しつつ、医学界と無関係な論者こそが種痘問題に介入できるとして大義名分を示したのであった。

メディア史上の『覚書』の意義については別稿に譲るが、科学アカデミー会員である彼がその有名性を拠所に、当代のメディアを駆使してパリ大学の内科医の見解に異を唱えたことは、種痘論争が再燃し、議論の裾野が大幅に拡大する契機となった。それ故に『覚書』は、種痘論争が内輪の医学論争から学際的論争へ転換した「変革 *révolution*」⁽⁸⁾と評されたのである。

但し、『覚書』はそれまでに出版された種痘関連著作の知見を集積し、デュヴラック論文に反論する趣旨で書かれたため、著者自身が臨床医学を通じて種痘実践を解していたわけではなかった。それ故に彼の主張は、冒険家として訪れたペルーでの体験⁽⁹⁾を除き、殆どが英国とジュネーヴ共和国発の経験主義的な種痘擁護論をフランス王国の議論に換骨奪胎したものであった⁽¹⁰⁾。特にデュヴラックに反論する第二部「反論に対する返答」とフランス王国に種痘を導入するメリットを説く第三部「結論と見解」で、彼はフランスの停滞期に種痘を進歩させた両国の種痘擁護論を最大限に利用した⁽¹¹⁾。英国からは、内科医ジェームス・ジュリン『博学なるケイレブ・コーツワース氏への手紙』⁽¹²⁾(1723)と『大英帝国における天然痘の種痘成功に関する報告』⁽¹³⁾(1725)、そして外科医ジェームス・カークパトリックの『種痘の分析』⁽¹⁴⁾(1754)が度々引用された。これらの共通項は、種痘の臨床データを集積し、自然の天然痘の方が種痘より死亡率が高いことを

(7) *Ibid.*, p. 15.

(8) グリム『文芸通信』1756年4月15日付の記述によれば、「ラ・コンダミーヌ氏は『天然痘の種痘に関する覚書』でフランスに変革 *révolution* を起こした。〔中略〕待ち切れずに反響が起こり、その時から種痘に賛成あるいは反対する説が絶えず主張されるようになった (Friedrich Melchior Grimm, *Correspondance littéraire, philosophique et critique de Grimm et de Diderot*, t. 1, 1753-1756, Paris, Furne, 1829, p. 454)。」

(9) La Condamine, *op.cit.*, 1754, pp. 18-19.

(10) これは読者が書物などを自己流に読み替え、ずらしていくことで主体的に表象を再構築する「領有 *appropriation*」の問題とも繋がる (ロジェ・シャルチエ『読書の文化史——テキスト・書物・読解』福井憲彦訳、新曜社、1992年)。

(11) 第二部は種痘に対するデュヴラックの反論を六つに集約し、それに回答する形で構成される (La Condamine, *op.cit.*, 1754, pp. 32-59)。

(12) James Jurin, *A Letter to the Learned Caleb Cotesworth, M.D., Containing A Comparison between the Mortality of the Natural Small Pox and that given by Inoculation*, London, J. Innys, 1723.

(13) Id., *Relation du succès de l'inoculation de la petite vérole dans la Grand Bretagne par M. Jurin traduit de l'Anglais par M. Noguez*, Paris, Noel Pissot, 1725.

統計的に示した点にある。後述のように、こうした医学における初期的な統計学の導入は、国内では目新しい議論と見做された。他方、ジュネーヴ共和国からは、内科医ブティーニの『種痘によって伝染した天然痘についての試論』（1752）と外科医ダニエル・ギュイヨが国外会員 associé étranger として王立外科医アカデミー論文集に寄せた報告『ジュネーヴで実践される天然痘の種痘に関する歴史の覚書』⁽¹⁵⁾が引かれている。種痘普及には政府の協力が不可欠で、行政長官・学者・文人などが政府を動かすべきという前者の著作の結論は彼の主張とほぼ一致している⁽¹⁶⁾。また、後者の著作については、著者のギュイヨと書簡を交わし、種痘について学んだとラ・コンダミヌ本人が証言している⁽¹⁷⁾。

つまり結局のところ、『覚書』に新たな医学的発見はなく、引用した著作もカークパトリックを除けば、殆どが国内に流通しているものであったということである⁽¹⁸⁾。また、彼がジュリンやカークパトリックを模倣して概算した種痘で救われるパリ市民の人数も、人口などの情報が不正確であり、英国ほどの精度はなかった。それ故に彼の功績は寧ろ、外科医を含めた国外の医師の知見を頼りに閉鎖的だった種痘論争を拡張し、何より、種痘に社会的・精神的価値を付与したことにあろう。

しかし、哲学的と名付けるべき斯くも良識のある洗練された世紀にも、毎年その無知と偏見と人間の善に対する無関心によって、愚かにもフランスにおいてのみ、我々が守る国の二万八千人の臣民を生け贄として捧げていることに我々は気づかない。つまり、我々は哲学者でも市民でもないことを認めねばならない。とはいえ、本当に公共善 bien public が種痘を定着させることを望むならば、子供に種痘を行うことを父親たちに強制する法律を作らねばなるまい。[中略] 未来に目を向けてみよう。いつか我々にも種痘が定着するだろうか？私はそれを全く疑っていない。人間の理性の発展に絶望するところまで我々を貶めてはならない。理性は遅々とした歩みでやってくる。無知、迷信、偏見、狂信、善への無関心はその歩みを更に遅くし、着実に陣地を死守する。だが闘いの時代の後、勝利の時はやってくるだろう⁽¹⁹⁾。

(14) James Kirkpatrick, *The Analysis of Inoculation : History, Theory, and Practice of it*, London, J. Millan; J. Buckland; R. Griffiths, 1754.

(15) Daniel Guyot, « Mémoire historique sur l'inoculation de la petite vérole, pratiquée à Genève, depuis le mois d'octobre 1750, jusqu'au mois de novembre 1752 inclusivement », dans *Mémoires d'Académie royale de chirurgie*, t. 2, Paris, Delaguette, 1753, pp. 99-103.

(16) ラ・コンダミヌはブティーニよりも種痘論争に参加する公衆の範囲を狭く想定した。前掲長谷部論文、2022年、146頁も参照されたい。

(17) La Condamine, *op.cit.*, 1754, p. 23.

(18) 王立外科医アカデミー論集に収録されるギュイヨの論文は勿論、内科医ノゲが仏訳したジュリン『大英帝国における天然痘の種痘成功に関する報告』や、ブティーニ『種痘によって伝染した天然痘についての試論』もフランス国内で出版許可を得ている。

(19) La Condamine, *op.cit.*, 1754, pp. 66-68.

演説は、理性の発展や迷信に対する勝利など啓蒙期の進歩主義的な常套表現を使用し、種痘が科学アカデミー全体の追求する有用性 *utilité* に適う行為であることを強調した。こうしたナラティブを通じて、種痘は、子を持つ父親の義務となり、フランス王国を支え、公共善に寄与する臣民、つまりはナシオンの使命⁽²⁰⁾となったのである。

この後、演説はフランス全土で話題になり、またヨーロッパ各国語にも翻訳され、国内外に広く種痘の問題を提起することになった⁽²¹⁾。そして、種痘論争は18世紀の「^{リンガ・フランカ}国際言語」であるフランス語を介し、国際的展開を遂げていった。実際早くも同年、国外で二つの種痘擁護論が発表されている。ラ・コンダミーヌによれば、いずれもフランスではあまり話題にならなかったが、それぞれ『覚書』と異なる視座を提示した⁽²²⁾。

一つはハーグのカルヴァン派牧師シャルル・シェーが著した『種痘によって天然痘を伝染する方法を擁護する試論』である。1752年に設立されたオランダ科学アカデミーの最初の論集にオランダ語訳と共に採録された同書は主に、種痘技術の説明、英国・ジュネーヴ共和国・ネーデルラント共和国の種痘発展史、種痘反対論への回答から構成されており、『覚書』との類似が見出される⁽²³⁾。だが最大の特徴は、聖書を用いて、種痘がキリスト教道徳に反するものでないとプロテスタントの観点から説いたことにある。同じく聖書を基に種痘を擁護した英国の著作『宗教的観点から公平に考察された、種痘によって天然痘を受容することの問題』⁽²⁴⁾ (1750) を参照しつつ、シェーは種痘の宗教的解釈をめぐる三つの問題（神が与えた天然痘に罹ることを恐れ、自ら種痘を取り込むことは「神の善を来らせるために悪を成す」⁽²⁵⁾ ことであり、罪ではないか？隣人に種痘を勧めることがいずれ過ちにならないか？種痘をすることそのものが神を試すことではないか？）に回答した。

後に18世紀の家庭医学本最大のベストセラー『健康に関する民衆への意見』⁽²⁶⁾ (1761) の著者

(20) 「公共善が問題になっている時、その知性の光の対象となる人々を教化し、明白な事実が影響力を持たない群衆を権威の影響力で牽引すべく考えるのは、ナシオンの使命である (*Ibid.*, p. 71)。」

(21) イタリアを中心とするラ・コンダミーヌ演説の国際的影響については、Yasmine Marcil, « Entre France et Italie, le mémoire en faveur de l'inoculation de La Condamine », *Pratiques scientifiques, intellectuels et politiques de la traduction (1660-1840)*, [en ligne], no. 13, 2018, <http://journals.openedition.org/irf/1887>を参照のこと。

(22) Charles-Marie de La Condamine, *Second Mémoire sur l'inoculation de la petite vérole*, Avignon, F.B. Merande, 1761, p. 10.

(23) トロンシャン以外にも、ライデンの内科医ドーゾィ、ハーグ大学解剖学教授シュヴェンケが種痘医としてネーデルラントで活動していたという (Charles Chais, *Essai apologétique sur la méthode de communiquer la petite vérole par inoculation*, La Haye, Pierre de Hondt, 1754, pp. 42-46)。

(24) [Francis Joseph], *The Case of Receiving the Smallpox by Inoculation, Impartially considered, and especially in a religious view*, London, James Buckland and James Waugh, 1750. 序文にはレスター郊外ハーバラ地区の司教 David Some が所蔵する1725年の書簡を司教 Doddridge が修正し、25年越しに出版したと記されている。

(25) 『ローマ書』第3章 第8節。

(26) Samuel-Auguste Tissot, *Avis au peuple sur sa santé*, Lausanne, l'imprimerie de J. Zimmerli, 1761.

として名を馳せるジュネーヴの内科医、サミュエル・ティソが著した『正当化された種痘』も同年の出版である。英国の議論のみを扱うシェーと異なり、ティソは同書をブティーニとラ・コンダミーヌの後継作品に位置づけ、『覚書』の三つの弱点——理論を省略している、医師ではないので実践について少ししか述べていない、全ての反論に返答できていない——を指弾した⁽²⁷⁾。ティソはこれを補うべく、『覚書』以上に医学理論と実践に的を絞った議論を展開した。加えてラ・コンダミーヌと同様、「反論に対する返答」の項目を設置し、種痘反対論が提示した全12問を「精神的考察 observations morales」と「肉体的考察 observations physiques」に分けて返答した。特に第5問「子供の種痘で用心していない複数名に病気が広がり、死人が出る」、第10問「種痘の際、天然痘を採取した人が罹患していた別の病気に感染させる」、第11問「種痘は隠れた病気を進行させる」では、ラ・コンダミーヌが十分に扱えなかった問題に医学知識を踏まえて論及しており、理論と臨床の両面から『覚書』を補完している⁽²⁸⁾。

以上、パリの天然痘大流行が過ぎた1754年は、種痘論争史上でも重要な著作が一斉に出版された年であった。種痘を論じたフランス語の著作はそれまで極めて少なかったが⁽²⁹⁾、英国の種痘擁護論がネーデルラント共和国やジュネーヴ共和国を介して急激に受容され、かような事態に至ったと巨視的に捉えることも可能である。それはまた、オーストリア継承戦争と七年戦争の間の英仏対立の小康状態にも起因するだろう。いずれにせよ、種痘論争の学際化は国際化と表裏一体の関係にあり、それ故に次のような国内の旧勢力の反発を招くことになった。

2. パリ大学医学部の動向——反対論者の牙城？

戦略的なメディア活用と有^{セレブリティ}名性により、ラ・コンダミーヌ『覚書』は、各方面から反響を呼んだ。内輪もめを避けるためか、かつて種痘論争から排斥されたパリの外科医はギュイヨの報告に追従しなかったが、パリ大学医学部の内科医たちの長い沈黙は、『覚書』の登場で破られることになった⁽³⁰⁾。

まず、当然ながら『覚書』への反論を試みる論者は、種痘の導入を見送った同学部から多数登場した。1755年に再版された、デュヴラックのラテン語論文の仏訳はその嚆矢と言える。新たに

(27) Id., *L'inoculation justifiée, ou Dissertation pratique et apologetique sur cette Méthode avec un Essai sur la muë de la voix*, Lausanne, Marc-Michel Bousquet, 1754, pp. XIII-XV.

(28) 第5問では、瘴気説を採用しつつ、瘴気は病人から殆ど発散されないので、種痘で天然痘が広がることはないと主張した。また仮に感染が広がっても、季節が良く天然痘が蔓延していない時期であれば問題ないとした (*Ibid.*, pp. 102-105)。第10・11問では、皮膚疾患を患った女性の天然痘を接種材料にした際、被接種者の目に炎症が出たとする外科医ギュイヨの遭遇した症例などを紹介し、接種材料に配慮する重要性を指摘した (*Ibid.*, pp. 117-121)。

(29) 「現在までに存在する、種痘に関する作品の数々はラテン語か英語で書かれているが、フランス語しか話さない国々では全くもって知られていない (*Ibid.*, p. XI)。」

(30) 外科医排斥については、前掲長谷部論文、2022年、141-143頁を参照されたい。

追加された序文は、同論文が学部の総意を示すものではないと留保しつつも、一部要約に過ぎないものを批判するラ・コンダミヌスを牽制した⁽³¹⁾。学内でのラテン語を介した議論も活発化したが、基本的に種痘の導入に否定的な意見が大勢を占めた。例えば、後に学内で発足した委員会議で種痘反対派に名を連ねる、アンリ・ジャック・マッカールの『体中ノ天然痘ニツイテ、技術ハ廃止サレウルカ？アルイハ種痘ハ導入サレルベキカ？』⁽³²⁾(1754)や、同じく後に匿名で種痘反対論を出版するル・オックが主査を務めるマラン＝ジャック＝クレール・ロベールの学位論文『瘡気ハ天然痘ノ種痘カラ出ルカ？』⁽³³⁾(1757)がそれに該当する。また、トロンシャンを誹謗したために、同学部が差し止めた博士候補生レイ Leys の論文も1757年に提出されている⁽³⁴⁾。

こうした学生の動きに加え、医学部総会への参加権を持つ理事医 *docteur-régent* にも、種痘に懐疑的な立場をとる人物が多数いた。かつて、種痘導入を擁護していたジャン・アストリュックも匿名で『パリ大学医学部に示す天然痘の種痘への疑義』(1756)を出版し、被接種者でも自然の天然痘に罹る、種痘擁護論者は無根拠な生來說⁽³⁵⁾に依拠している、種痘が確実に危険がないというのは嘘である、とラ・コンダミヌスに反論した。彼は学内の委員総会でも反対派に加わるため、完全に導入を否定する立場に翻意したと考えられる。また、1759年2月から同年10月までの間に、『メルキュール』誌上でラ・コンダミヌスと論戦を繰り広げたルイ15世の侍医の一人、ジュリアン・ゴラールも、内科医トロンシャンの種痘を受けた貴族ドラトゥールの息子が病気に罹った事故を根拠に、種痘の危険性を訴えた⁽³⁶⁾。

そして、英国人の理事医アンドリュウ・カントウェルは当時、最も多くの著作を上梓した種痘反対論者である。彼もアストリュックと同様、種痘反対論者に転向した内科医であったが、実際に英国で種痘実践に携わり、現地の知識を以て種痘の危険性を訴えた点で、他の反対論者と異なっていた。彼が最初に著した『種痘に関する論文』(1755)はラ・コンダミヌスへの書簡という体裁をとり、種痘を実践している英国で住民が増えたという根拠はなく寧ろ種痘を受けた人間に被害をもたらす、想像以上に多くの人間が種痘で死んでいる、種痘によって顔が崩れ美貌を失う可能性がある、種痘によって永遠に病気に罹らないわけではない、という四つの結論を提示し

(31) Louis Duvrac, *Est-il permis de proposer l'inoculation de la petite vérole ?*, Paris, Delaguet, 1755, p. VII.

(32) 学位論文審査の招待状のみが残存しており、内容は不明である (Henri-Jacques Macquart, *An virus variorum intra corpus, Arte possit extingui?, Inoculatione debeat intrudi?*, Billet d'invitation à la soutenance de thèse de médecine, 1754)。

(33) Marin-Jacques-Clair Robert, *An à Variolarum inoculatione aër insalubris ?*, Paris, Quillau, 1757.

(34) Catriona Seth, *Les rois aussi en mouraient: Les Lumières en lutte contre la petite vérole*, Paris, Éditions Desjonquères, 2008, p. 54.

(35) 人間は生まれながらにして天然痘の胚を体内に保持しているとする説。実際、ラ・コンダミヌスはこの説を基に種痘擁護論を唱えた (前掲長谷部論文、2022年、144頁)。

(36) この論戦は1758年12月号に高等法院弁護士B氏を名乗る匿名の人物がこの一件を知らせる『メルキュールの著者への書簡』を投稿したことに端を発する (« Lettre à l'Auteur de Mercure », dans *Mercur de France*, Decembre 1758, pp. 151-152)。その後、計7通の書簡が同誌上に掲載された。

た⁽³⁷⁾。こうした彼の主張を同学部当局が支持したことは、検閲官の出版許可証に加え、当時の学部長ショメルと4名の理事医（マルティナंक、スロン、ボワイエ、マッカー）の署名入りで、医学部が直々に出版許可証を添付した点にも示される⁽³⁸⁾。そもそもカントウェルは、前学部長バロンの依頼で同論文を執筆したという⁽³⁹⁾。

また、彼は論文を激賞する学内の理事医ミッサからの手紙⁽⁴⁰⁾や『高等法院弁護士 *** 氏へのカントウェル氏の書簡』（1756）などで、学内の内科医に加え、海外を含む他大学の内科医や非医療関係者との連携もアピールした。実際、後者の著作は、ランス大学医学部のジョズネのような内科医だけでなく、パリの外科医ルモニエや宗教関係者（ドナゴン師、ローラン神父）からも種痘事故の証言を集めている⁽⁴¹⁾。また、後述するウィーン大学の内科医アントン・ド・ハーエンがラテン語で著した種痘反対論を仏訳した『天然痘誌』（1758）も上梓している⁽⁴²⁾。カントウェルの活動は、種痘反対論者側に業界や国境を超えた協力関係が構築されつつあったことを示している。

このように学部当局は、種痘導入を阻止するための言論を形成する立場に積極的に与したと言える。だが学内には、ラ・コンダミーヌに賛同し、種痘を支持する関係者も少なからず存在した。1755年にロンドンに留学してジョージ2世の筆頭外科医ジョン・ランビーから種痘を学んだ内科医アンブロワーズ・オスティもその一人である⁽⁴³⁾。彼が帰国後に執筆した英国での種痘の実施状況の報告は、ラ・コンダミーヌの協力者エリー・フレロンが主幹を務める『文芸年鑑』1755年8月号に全文が公開され、『メルキュール』1755年8月号にも一部抜粋が掲載された⁽⁴⁴⁾。

さらにパリ大学医学部の博士候補生 bachelier ピエール＝ジョゼフ・モリゾ・デランドも、実践に注力するオスティより積極的に、擁護論者として活動した。1755年11月、彼が同学部に提出した博士論文『パリで天然痘ノ種痘ヲ行ウカ？ *An Parisinis Variolarum inoculatio?*』はデュヴラックに反論し、パリで種痘を行うべきという結論を提示した⁽⁴⁵⁾。彼はさらに数学者モンテュクラと共に、種痘擁護論・反対論を集めた初の選集『天然痘の種痘に関連する、またはその安全

(37) Andrew Cantwell, *Dissertation sur l'inoculation*, Paris, Delaguet, 1755, pp. 79-80.

(38) *Ibid.*, p. 83.

(39) Id., *Lettre de M. Cantwel à M de ****, *Avocat en Parlement*, Paris, Delaguet, 1756, p. 2.

(40) Henri Michel Missa, *Lettre de M. Missa au sujet de l'inoculation*, Paris, Didot, 1755.

(41) Andrew Cantwell, *op.cit.*, 1756, pp. 7-17.

(42) Id., *Tableau de la petite vérole*, Paris, Jean-Thomas Hérisant, 1758.

(43) La Condamine, *Second mémoire sur l'inoculation de la petite vérole*, Avignon, F.B. Merande, 1761, p. 22.

(44) Ambroise Hosty, « Rapport de M. Hosty, Médecin, au sujet de l'inoculation », dans *L'Année Littéraire*, t. 4, Amsterdam, Michel Lambert, 1755, pp. 242-262; « Extrait du rapport de M. Hosty, Docteur-Régent de la Faculté de Médecine de Paris, pendant son séjour à Londres, au sujet de l'inoculation », dans *Mercure de France*, Paris, Chaubert; Jean de Neuilly; Pissot; Duchesne, 1755, pp. 163-182.

(45) Pierre-Joseph Morisot-Deslandes, *Quaestio medica quodlibetariis disputationibus manè discutienda in Scholis Medicorum, An Parisinis variolarum inoculatio?*, Paris, Quillau, 1755.

性と有用性の証明に適する作品集』(1756)を匿名で出版し、双方の論文を集めつつも、編者として種痘の有用性を擁護する立場を表明した⁽⁴⁶⁾。

とはいえ、この段階の学内関係者は、医学界外で活動する擁護論者との連携や、種痘擁護の表明に慎重であった。実際、オスティは当初、英国人としての使命を果たすための報告に留まり、種痘反対論を一切攻撃しなかった。また、モリゾ・デランドの博士論文は医学部を動揺させたが、彼は一介の学生に過ぎず、前年冬に提出された種痘を擁護する別の博士論文はリジェクトされた⁽⁴⁷⁾。『作品集』が匿名で出版せざるを得なかったこともその証左である。

それでも、学内の種痘擁護論者による水面下の活動はある程度確認できる。事実として、モリゾ・デランドの種痘擁護の博士論文審査に署名した十名の比較的若い理事医のなかには、後にルイ16世の種痘を指揮する筆頭内科医ラッソヌが含まれている⁽⁴⁸⁾。また、内科医ヴァンデルモンドが1754年に創刊した『ジュルナル・ド・メドゥシーヌ』は中立を標榜しつつ、匿名の候補生が種痘を擁護した博士論文を掲載した⁽⁴⁹⁾。彼らの活動は、後に学内で発足する委員会議における擁護派と反対派の派閥形成の端緒と言えよう。

また、当該期の種痘論争には関与しなかったモンペリエ大学医学部では1760年、内科医クラッススがラテン語で種痘擁護論を提出し、空席だった教授職を得ている⁽⁵⁰⁾。これ以降、モンペリエは全面的に種痘擁護論の側についたという見方もあるが、種痘論争での生気論者たちの活躍は、1763年以後を俟たねばならない⁽⁵¹⁾。これについては稿を改めて論じる。

3. 科学アカデミーと哲学者^{フィロゾフ}——確率論をめぐる議論

先述のとおり、当該期の種痘論争は、種痘を公共善にまつわる学際的問題として再提起したラ・コンダミーヌと、それに呼応する論者の出現に特徴づけられる。そして、科学アカデミーはラ・コンダミーヌが『覚書』を含めて三度発表の場を選んだだけでなく、彼に追隨する医学界に属さない論者を輩出した点でも、当時の論争を牽引した論壇に位置づけられる⁽⁵²⁾。

科学アカデミーは発足当初から医学界と緊密な関係を維持した。外科医アカデミーの発足(1731)などにより、1740年代から革命に至るまで減少傾向が続いたとはいえ、医療関係者(内

(46) Pierre-Joseph Morisot-Deslandes et Jean-Étienne Montucla, *Recueil de pièces concernant l'inoculation de la petite vérole et propres à en prouver la sécurité et l'utilité*, Paris, Désaint et Saillant, 1756.

(47) Louis Duvrac, *op.cit.*, p. VIII.

(48) Pierre-Joseph Morisot-Deslandes, *op.cit.*, 1755.

(49) 詳しくは拙論「十八世紀中葉フランスにおける医学専門誌と種痘論争——『ジュルナル・ド・メドゥシーヌ』と『ガゼット・サリュテール』を中心に——」『史観』第188冊、2023年、54-78頁を参照されたい。

(50) Pierre-Étienne Crassous, *Quaestiones Duodecim ab illustrissimis viris R. D. Joanne-Francisco Imbert, Monspeli, Apud Augustinum-Franciscum Rochard*, 1760, pp. 16-18.

(51) Laurence Brockliss and Colin Jones, *The Medical World of Early Modern France*, Oxford, Oxford University Press, 1997, pp. 470-471.

科医・外科医)は科学アカデミーで最も大きな割合を占める職業であり、医学は主要なトピックの一つであり続けた⁽⁵³⁾。ただし、科学アカデミーが扱う医学は大抵の場合、解剖学・外科医学・獣医学・薬学のサブジャンルに限定され、内科医の専門領域を侵犯するような問題設定は敬遠される傾向にあった。それ故に、種痘問題に介入した『覚書』は、科学アカデミー史上でも挑戦的な試みであったと推察される⁽⁵⁴⁾。

そして、数理科学の手法を医学に導入する『覚書』の手法は、英国のジュリンを模倣したに過ぎないにせよ、当時の科学アカデミーにおける対立構造——確率論を積極的に利用し、政治算術の発展を模索するビュフォン派と、大陸的な数学観とニュートン力学を折衷し、医学や人間社会への数学の適用に懐疑的なダランベール派の対立——においては、前者の手法に近しいものであった⁽⁵⁵⁾。科学アカデミーにおける両派閥の対立は、『覚書』以後の議論に大きく作用した。

数学者を多く輩出したベルヌーイ族の次男ダニエルは、ラ・コンダミーヌの問題意識を承継し、より厳密な形で追究した。彼は1760年4月16日、科学アカデミーに『天然痘の死亡率とそれを予防する種痘の利点についての新たな分析の試み』⁽⁵⁶⁾を発表し、より本格的な統計学で種痘の有用性を証明しようとした。既に複数の研究が論じているため、具体的手法は割愛するが、彼は天文学者として有名な英国のハレーが作成した生命表を活用し、何もせずに天然痘に罹るより、若い時に種痘を受けた方が子供の平均寿命 *la vie moyenne* が延びることを数学的に証明した⁽⁵⁷⁾。ベルヌーイは生涯にわたる天然痘のリスクと一時的な種痘のリスクを比較することで、ジュリン

(52) 第二の覚書は1758年11月15日の公開集会で発表された (La Condamine, *op.cit.*, 1761)。第三の覚書は当初、1764年11月14日の公開集会で発表されるはずだったが、11月17日・21日・24日の定例会議 *les assemblées particulières* で発表された。現存する論文は1765年に更なる加筆を経たものである (La Condamine, « Suite de l'histoire de l'inoculation de la petite vérole depuis 1758 jusqu'en 1765, Troisième mémoire », dans *Histoire de L'inoculation de la petite vérole, ou Recueil de mémoires, lettres, extraits et autres écrits, sur la petite vérole artificielle*, Amsterdam, la Société typographique, 1773, pp. 221-282)。尚、対外的に開かれる公開集会は年二回、原則として会員のみが参加する定例会議は週二回の頻度で開催された (小風綾乃「摂政期のフランス王権とパリ王立医学アカデミー—1716年の会員制度改定を中心に—」『人間文化創成科学論叢』第21巻、2018年、53-61頁)。

(53) 医療関係者は会員全体の28.2%を占めており、医学関連トピックは全体の12.3%を占めていた。詳細は James E McClellan, « The Académie Royale des Sciences, 1699-1793: A Statistical Portrait », *Isis*, Vol. 72, No. 4, 1981, pp. 541-567を参照のこと。

(54) 科学アカデミーは、科学について演繹的な数理科学 (地理学・天文学・工学) と帰納的な自然科学 (化学・解剖学・植物学) という二分法を維持した (*Ibid.*, p. 544)。

(55) ビュフォン派とダランベール派の対立については、隠岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」—フーントネルの夢からコンドルセのユートピアへ—』名古屋大学出版会、2011年、109–129頁を参照のこと。

(56) Daniel Bernoulli, « Essai d'une nouvelle analyse de la mortalité causée par la petite vérole et des avantages de l'inoculation pour la prévenir », dans *Mémoires de mathématiques et de physique, Académie royale des sciences*, 1760, Paris, L'imprimerie royale, pp. 1-45.

(57) Nicolas Bacaër, *A Short History of Mathematical Population Dynamics*, Berlin, Springer, 2010; Catriona Seth, *Les rois aussi en mouraient: Les Lumières en lutte contre la petite vérole*, Paris, Éditions Desjonquères, 2008, pp. 207-232.

を模倣した『覚書』の統計では表現できなかった種痘の長期的なメリットを明示した⁽⁵⁸⁾。

これに対し、『百科全書』の編者として有名な哲学者^{フィロソフ}ダランベールは同年11月12日、『天然痘の種痘に対する確率計算の適応に関する哲学的・数学的考察』を発表し、ベルヌーイに対する反論を提出した⁽⁵⁹⁾。彼はここで種痘擁護論者を標榜しつつも、様々な要素を考慮せずに、種痘の成功と失敗、あるいは天然痘による死を数字として処理し、確率に帰するベルヌーイのやり方に疑義を呈した。

恐れを希望と正確に比較できなければ、人々は人工の天然痘で死ぬ可能性があるという種痘擁護論者たちの告白から言質を取る。そして、彼らは種痘を一月のうちに死ぬ、差し迫った近い危機と見做し、天然痘を長い人生のうちで割り当てられるかもしれない不確実な危険と見做す。二つのリスクの正確な比較はできず、比率も固定できない以上、前者のリスクの存在は、後者の不確かな大きさよりも彼らに衝撃を与えるだろう。[中略] 現在を享受し、未来を少ししか懸念しない。これは一般的な論理である。それ故に、成功と失敗半々の論理で人々が自己改善することなど望んではいけない⁽⁶⁰⁾。

予てより、ダランベールは生起する可能性がある全ての事象を数え上げられない医学的・社会的事象に確率論を用いることに懐疑的であった⁽⁶¹⁾。それ故に、ベルヌーイの主張は様々な可能性を切り捨てた一面的解釈に過ぎず、種痘接種を促すための十分な根拠にはなりえないと彼は反駁したのである。そして同報告は、医師側の適切な用心 *précaution convenable*こそが種痘の発展に重要であると指摘し、種痘の将来的な発展に対する進歩主義的な展望を結語としている。確率論の利用をめぐる両者の対立は、ビュフォン派とダランベール派の争点の一つとしても解釈できるが、同時に後の種痘論争の争点に先駆けた部分も見出される。それは政体 *État* と個々人 *les particuliers* の種痘に対する認識の違いを指摘する次の箇所によく表現されている。

ところで、私はどんな立法者に、五人のうち一人が死に、四人が死を免れ、百年の人生が保障されるという（政体に好都合な）推定の下、市民に種痘を強制する権利があるのか、と問うている。これは政治算術家たち *Arithméticiens politiques* が携わるべき問題である。しかし、

(58) ベルヌーイの手法とビュフォン派の連続性は生命表の活用に際し、ビュフォン『博物誌』を引用したことも示される (Daniel Bernoulli, *op.cit.*, 1760, p. 11)。

(59) Jean Le Rond d'Alembert, « Sur l'application du calcul des probabilités à l'inoculation de la petite vérole », dans *Opuscules mathématiques ou Mémoires sur différents sujets de géométrie, de mécanique, d'optique, d'astronomie*, t. 2, Paris, David, 1761, pp. 26-95.

(60) Jean Le Rond d'Alembert, *op.cit.*, 1761, pp. 34-35.

(61) この問題については、前掲隠岐論文、2010年にも詳しい。

少なくとも我々の仮説から学べるのは、このデリケートな主題において、政体と個々人の利害は別に計算されるべきだということである⁽⁶²⁾。

彼の問いは、アントワヌ・プティなどパリ大学医学部の種痘擁護論者の「穏健派」に共有され、フランス革命後の全般的種痘 l'inoculation générale をめぐる議論に大きな影響を及ぼすことになった。つまり科学アカデミーは、速やかな種痘の拡大を目指す立場から将来的な種痘の発展を目指す立場までのグラデーションを種痘擁護論者内に生み出したのであった。

実際、科学アカデミーに近い^{フィロゾフ}哲学者らの間にも明らかに温度差はあった。例えばソフィー・ヴォラン嬢への書簡でダランベールの主張に憤慨したディドロや⁽⁶³⁾、『第三の覚書』で反論を試みたラ・コンダミーヌなどはダランベールに強く反発する立場をとった。だが、ヴォルテールは種痘が普及しないフランスの遅れを嘆きつつも、友人ダランベールの発表を咎めなかったし、ルソーは普遍的に種痘を広めようとするティソに事例ごとの個別性を重視すべきと書簡で説いている⁽⁶⁴⁾。確かに^{フィロゾフ}哲学者らは^{セレブリティ}有名性を介して、種痘に関する知識の普及に大きく貢献したが、後代の人々が種痘を啓蒙の所産とするなかで、各人が持つニュアンスを等閑視したことも考慮せねばなるまい。

4. トロンシャンからガッティへ——「名医」の擡頭と種痘論争の激化

1754年以降、種痘は実践面でも一時的な拡大を見た。翌1755年からはシャテリユクス侯爵のように自ら種痘を受ける若い貴族が登場し、孤児への種痘実験がパリで開始された⁽⁶⁵⁾。しかし同年秋、当時14歳のシャプラン嬢が種痘の直後に命を落とす事件が社交界の話題になり、種痘普及活動はすぐさま停滞することとなった⁽⁶⁶⁾。

この停滞を打開したのは、1756年、種痘を擁護した摂政オルレアン公フィリップの孫、オルレアン公ルイ・フィリップ1世の招聘により、内科医トロンシャンがジュネーヴからパリに來訪し、彼の子息と子女に種痘を施した一件である。トロンシャンのパリ訪問、および子供に種痘を接種

(62) Jean Le Rond d'Alembert, *op.cit.*, 1761, p. 38.

(63) 「ああ、科学アカデミーの再開に際してダランベールが読み上げたのは、全ての愚か者が種痘に反対する作品と取るに違いなく、全ての教養人が賛成論ではないと言う覚書でした。私は統計学については分かりませんが、承服しかねます。方程式は描いておくとして、そのやり方を載します (Denis Diderot, « Lettre à Sophie Volland », dans *L'oeuvre complète de Diderot*, t. 19, Paris, Garnier, 1877, pp. 36-37)。」

(64) Samuel Auguste André David Tissot to Jean Jacques Rousseau, 8 July 1762, accessible via Electronic Enlightenment, <https://doi.org/10.13051/eedoc/rousjeVF0110238alc> (accessed 15 August 2024). ルソーは『エミール』でも種痘についてアンビバレントな見解を示した(長谷部圭人「『身体教育』の創出と天然痘——近世フランスの医学系教育マニュアルを手掛かりに——」『エクフラシス』第14号、11-12頁)。

(65) 18世紀フランスの子供に対する種痘実験に関しては、Catriona Seth, « L'inoculation contre la variole: un révélateur des liens sociaux », dans *Dix-huitième siècle*, no.41, 2009, pp. 137-153を参照のこと。

(66) Charles-Marie de La Condamine, *op.cit.*, pp. 15-22.

するオルレアン公の父親としての決断は、ジメネス公爵、小ボワンジネ、ラッテニヤンの頌詩でそれぞれに絶賛され、トロンシャンの許には接種希望者が殺到したという⁽⁶⁷⁾。

勿論、この事態は第一に、当時のフランスで外科技術を習得した内科医が稀少であったことに起因する。しかし、彼が足からの種痘という独自の技術を持つ「名医」であり、主治医としてヴォルテールの私生活に携わる著名人であったことは熱狂に拍車をかけた⁽⁶⁸⁾。そして、セレブのパリ訪問は、社交界の好奇心と同時に反感も大いに高めた。特にパリ大学医学部の内科医は新技術を独占する商売敵を目の敵にした。ダランベールが彼に宛てた1763年6月8日の書簡に「殆どそうであると確証を持って言えることとして、この論争は、最も権威のある内科医たちの間で血みどろの結末に至ったというより、医学が外科医学の力を借りざるを得ないことがおそらく問題なのでしょう」⁽⁶⁹⁾と記したように、外科技術を持つ内科医というだけで彼は異分子であった⁽⁷⁰⁾。表向きには彼らは多数の患者を抱えながら、丁寧に診察していないという理由でトロンシャンを批判したが、実際はテリトリーを荒らす組合組織外の内科医を排除する動きに等しかった。そして彼は結局、パリ大学医学部との確執を恐れ、夏を前にジュネーヴに帰国することを選んだのであった⁽⁷¹⁾。

それ故に1758年11月15日、科学アカデミーで二回目の演説『天然痘の種痘に関する第二の覚書』を発表した際、ラ・コンダミヌスは以前の演説よりも反対論者との対立を強調した。彼が1755年から1756年までに誹謗中傷を含む匿名のパンフレットが増加したと指摘したとき⁽⁷²⁾、その伏流にはトロンシャンとパリ大学医学部の対立があった。種痘論争は当初から単なる学問的議論の範疇を超えた葛藤を含んでいたが、その傾向はさらに強まっていった。トロンシャンを激しく誹謗したために、博士候補生レイ Leys の論文が差し止められた件もその証左と言える。そして、ラ・コンダミヌスが『フランスにおける種痘の現状に関する書簡』でいみじくも指摘したように、党派的精神 *l'esprit de parti* が混じった途端、種痘論争は人々を辟易させるものになっていった⁽⁷³⁾。

(67) Antoine-Alexandre-Henri Poinsinet, *L'inoculation. Poème a monseigneur le duc d'Orleans*, Paris, 1756; Gabriel-Charles de Lattaignant, *Les tronchinades*, sl., 1756. ジメネス (Ximènes) 侯爵の著作についてはボワンジネが言及しているものの、詳細は不明である。

(68) ^{セレブリティ}有名性の問題については、Antoine Lilti, *Figures publiques: l'invention de la célébrité 1750-1850*, Paris, Fayard, 2014を参照のこと。

(69) Henri Tronchin, *Un Médecin du XVIIIe siècle: Théodore Tronchin, 1709-1781: d'après des documents inédits*, Paris, E. Plon, 1906, p. 137.

(70) フランスの種痘実践は、内科医が種痘をどう準備し、手術を行い、経過観察をするかを決め、外科医が実際の手術を行い、種痘を埋め込むという分業体制が敷かれるケースが多数を占めた。例えばアヴィニョンの内科医エスプリ・カルヴェは、外科医ソーヴァン (Sauvan) と協力した (Laurence Brockliss and Colin Jones, *op.cit.*, p. 577)。

(71) *Ibid.*, p. 85.

(72) La Condamine, *op.cit.*, 1761, pp. 19-20.

(73) La Condamine, *Lettres de M. de la Condamine à M. le Dr. Maty sur l'Etat présent de l'inoculation en France*, Paris, Prault; Pissot; Durand; Panckouke, 1764, p. 27. ダランベールも前述の演説で既に議論が食傷気味であると指摘する (Jean Le Rond d'Alembert, *op.cit.*, 1761, p. 26)。

ただ、こうしたバッシングに対抗すべく、トロンシャンも^{フィロゾーフ}哲学者と積極的に協力関係を構築していくことになる。その最大の成果は『百科全書』第17巻に執筆した項目、「種痘（外科・内科・倫理・政治）INOCULATION（Chirurgie, Médecine, Morale, Politique）」⁽⁷⁴⁾だろう。彼はここで『覚書』を下敷きに全五部からなる長大な項目を上梓した⁽⁷⁵⁾。そして、内科医として種痘がもはや医学だけでなく、倫理や政治に関わる問題になったと認めたのであった。

^{フィロゾーフ}哲学者の側も、パリ大学医学部の内科医より、国外で外科医学の教育を受けた内科医との連携を模索した。例えばラ・コンダミーヌとティソの協力関係は、1754年以後も存続しており、ウィーン大学の内科医ハーエンが種痘反対論『種痘についての反駁』⁽⁷⁶⁾（1759）を著した際も、両者は互いの著作を引用している。特にティソとトロンシャンは、種痘論争が専門的な議論に入った際、医学に精通していない^{フィロゾーフ}哲学者らを補助する役割を担ったと言える⁽⁷⁷⁾。

他方、こうした医学界や科学アカデミーとは別の観点から種痘に対する熱狂を批判する論者も存在した。アミアンの司祭ジャッカン師が著した『哲学者・市民・キリスト教徒として検討する天然痘の種痘についての書簡』（1756）は、牧師シェーの種痘擁護論に対する反論として提出されたが、次のように現行の種痘が民衆を無視していると批判している。

しかし、この提案における新技術の恩恵は、人類を悩ませるこの病気の災禍を回避できる、恵まれた境遇をもつごく少数の人間に限られる。力と活気を生む政体の貴重な一部たる民衆は、それを取り上げられ、犠牲者となるだろう。あらゆる職人や貧者のうち何人が、肝心な準備を供給するのに必要な手立てや前払いの金を持っているだろうか⁽⁷⁸⁾？

実際、トロンシャンのような著名な種痘医は当時殆どの場合、限られた貴族やエリートに独占されており、民衆を相手にしなかった⁽⁷⁹⁾。種痘接種者をめぐる貧富の問題が早い段階で種痘に

(74) Théodore Tronchin, Article « INOCULATION, (Chirurgie, Medecine, Morale, Politique.) » dans *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts, et des métiers*, Paris, Briasson; David; Le Breton; Durand, 1751-1772, vol.VIII, 1765, pp. 755-769.

(75) 同項目については前掲井田論文、2010年、229-242頁にも詳しい。

(76) Anton de Haen, *Refutation de l'inoculation servant de réponse à deux pièces qui ont paru cette année*, Vienne, Jean-Thomas Trattner, 1759.

(77) 例えばブルーハーフェが種痘を支持していたかも、ハーエンとティソの争点になった。Samuel-Auguste Tissot, *Lettre à Monsieur de Haen en réponse à ses questions sur l'inoculation*, Vienne, Jean-Thomas Trattner, 1759, pp. 9-14.

(78) Armand-Pierre Jacquin, *Lettre sur l'inoculation de la petite vérole dans laquelle on examine cette méthode en philosophe, en citoyen et en chrétien*, Paris, Cailleau, 1756, p. 14.

(79) 『第二の覚書』の時点で、彼は少なくとも200人が種痘を受けたと証言しているが、列举された被接種者のほぼ全てが第一身分に属する貴族であった（La Condamine, *Second mémoire sur l'inoculation de la petite vérole*, Avignon, F.B. Merande, 1761, pp. 27-30）。

反対する側から提示されていたことは、注目に値する。ジャッカン師は特定の機関を代弁せず、また他の種痘反対論との連帯を示さずに、ラ・コンダミーヌとシェーを批判した。彼が本当に他の論者と無関係だったかは不明だが、少なくともパリの外で活動する論者は両陣営の激しい対立とは縁遠かったと考えられる。

こうした中で、1761年にパリに到着したピサ大学出身の内科医アンジェロ・ガッティは、トロンシャンと同様、貴族やエリート層を顧客とする種痘医として活動を開始し、同じパリ大学医学部の内科医と激しく対立することになる⁽⁸⁰⁾。そして、ガッティの有名性^{セレブリティ}に対するパリの内科医の敵愾心はついに、高等法院による種痘に関する初めての介入、つまり1763年の種痘禁止裁決を惹起することになった。これについては稿を改めて論じることとしたい。

5. おわりに

以上、ラ・コンダミーヌの演説があった1754年の動向と、パリ大学医学部・科学アカデミー・そして国外で教育を受けた外科技術を持つ内科医それぞれのその後の展開に焦点を当て、1763年までの種痘論争を分析した。英仏対立が一時的に緩和した当該期に種痘論争の国際化が促進され、これまでにない新たな争点が生み出された。それは医学的知見の蓄積による種痘の利点／欠点に関する議論の稠密化だけでなく、確率論の活用など新たな学際的視座の登場も意味している。また、種痘擁護論者 *inoculiste*／種痘反対論者 *anti-inoculiste* の語彙が浸透し、派閥化が急速に進行したのも当該期であった。両者の対立はトロンシャンへのバッシングで激化し、結果として種痘は読者の不興を買う話題になっていった。実際には、科学アカデミーとパリ大学医学部双方の内部にも細かい見解の相違があり、特に擁護論には革命期の議論に接続するニュアンスが生じ始めたが、種痘擁護論者／反対論者の包括的な連携は実現せず、それぞれが所属する業界^{ミリュー}に縛られた。科学アカデミーの哲学者^{フィロゾフ}は種痘擁護論者として、トロンシャンのような国内の医学界における異分子と積極的に連携したが、パリ大学医学部の内科医とは殆ど連携しなかった。種痘反対論者側のカントウェルも内科医・外科医・宗教関係者との国際的な連携を試みたが、彼の死後、そうした傾向は弱まっていった。

当該期における擁護論者／反対論者の対立は、医学だけでなく、文化・社会的な争点にも跨る不安定な区別と見做し得る。それ故に臨床主義／教条主義、イギリス／フランス、外科技術の有無、科学アカデミー／パリ大学医学部、啓蒙／反啓蒙などの単純な図式化にはそぐわない部分に注目する必要がある。これ以降の種痘論争で、ダランベールのアンビバレントな見解が支持されていくこともこうした図式化から外れた現象と言えるが、その検討は別稿に譲りたい。

(80) ガッティの種痘医としての活動については Veronica Massai, *Angelo Gatti (1724-1798) : un medico toscano in terra di Francia*, Firenze, Firenze University Press, 2008を参照のこと。